

シリーズ「遺跡を学ぶ」

010

新泉社

# 描かれた黄泉の世界

王塚古墳

〈改訂版〉

柳沢一男

# 描かれた 黄泉の世界

―王塚古墳(改訂版)―

柳沢一男

## 【目次】

第1章 王塚古墳の発見……………4

第2章 王塚古墳の構造……………10

- 1 遠賀川と筑豊地方……………10
- 2 筑豊最大級の前方後円墳……………17
- 3 多系統の横穴式石室……………20
- 4 装飾性に富んだ副葬品……………28

第3章 装飾古墳の世界……………32

- 1 墳墓装飾の系譜……………32
- 2 辟邪と他界……………36
- 3 描かれた他界……………39

第4章 王塚の壁画を読む……………42

- 1 王塚の壁画資料……………42
- 2 玄門前面の壁画……………46
- 3 玄室腰石をいろどる壁画……………55
- 4 石屋形の壁画……………64
- 5 墓室上部をおおう珠文群……………68

第5章 王塚の壁画を生み出したもの……………73

- 1 壁画の制作者……………73
- 2 筑紫君磐井と東アジア情勢……………78

第6章 壁画保存への苦難の歩み……………82

編集委員

勅使河原彰(代表)

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣  
本文図版 松澤利絵

# 第1章 王塚古墳の発見

## 壁画の発見

今から九〇年ほど前の一九三四年（昭和九）九月末、産炭地としてにぎわいをみせていた九州北部・筑豊地方ちくほうの土取り場から、のちに装飾古墳の白眉はくびと賞される壁画を描いた古墳が発見された。そして一〇月七日の福岡日日新聞に、「我國随一を誇る嘉穂かほの壁画古墳」と大きく報道され、広く人びとの知るところとなった。その古墳は王塚おうづか、墳長八〇メートルあまりの前方後円墳である。

かつて筑豊地帯はわが国有数の炭鉱地帯であった。採炭操業時、地下には坑道が縦横に走り、浅い坑道の落盤にともなってしばしば水田が陥没した。王塚から南に五〇〇メートルの水田が陥没し耕作できなくなったため、古墳の高まりが復旧に必要な土砂採取地になつたのである。

墓室をおおう墳丘は古く王塚とよばれ、古墳という認識はあつたらしい。しかし、いつの間にかその伝承は忘れられてしまった。土取り工事は七月からはじまり、二カ月を過ぎた九月三〇日の夕方、後円部にある横穴式石室の入口をふさぐ石積みにあたり、その一部をはずして墓室内に入った作業関係者によって壁画が発見されたのである。

王塚は、壁画発見三年後の一九三七年（昭和一二）に史跡に指定され、一九五四年（昭和二九）にあらためて特別史跡に指定された。装飾古墳でほかに特別史跡の指定を受けているのは、一九七二年（昭和四七）に発見された奈良県明日香村の高松塚古墳だけである。

## 墓室を埋めつくす壁画

六世紀前葉につくられた王塚古墳の壁画は、横穴式石室の玄室げんしつの壁全面と玄室入口の壁一面に、各種の図文がところ狭しと描かれている。

装飾古墳に魅了され、貴重な文化遺産の保護を訴えつづ



図2 ●王塚古墳の位置



図3 ●発見当時の石室入口付近



図1 ●王塚古墳の発見を伝える新聞記事  
福岡日日新聞 1934年10月7日。

けている玉利勲さん（元朝日新聞社）は、はじめて見学した王塚の壁画の印象をつぎのように記した。

「暗い穴からはしごで降りた石室は湿気を帯びてひんやりと冷たかったが、裸電球で照らし出された「死者の空間」は豪華な「赤のムード」でおおわれていた。まわりの壁に描かれた楯・鞍・大刀の列。あるいは蕨のような文様や三角形の連続文。それをいろどる赤・黄・黒・緑のあざやかな色彩。前室の壁には赤と黒の馬が描かれ、奥室の二台の石のベッドにも、まだ色あせぬ三角の文様があった。さらに天井近くまでぬりこめられたいちめんの赤い顔料。しみ水にぬれた岩はだのあやしいばかりの輝き」（朝日新聞、一九六一年六月二〇日、『装飾古墳紀行』）

残念ながら、私はまだ石室内に入って壁画を観察する機会をもたない。関東育ちの私が九州に来たのは一九七一年（昭和四六）、当時すでに石室内の見学は全面禁止だった。古墳時代を中心に勉強してき



図4 ●石室内見学禁止前の墓室入口と壁画

た私は、装飾古墳に興味をもち、九州内の見学可能な装飾古墳にほとんど足を運んできたつもりだが、王塚の壁画見学だけはかなわなかった。この壁画にはじめて対面したのは二〇〇二年（平成一四）の一〇月、観察用窓のガラス越しからだったが、予想以上に鮮明な壁画に心がふるえた。

### 古墳壁画の白眉

王塚古墳が発見された直後、行政当局はただちに調査にとりかかった。福岡県は囑託の川上市太郎さんを派遣し、墳丘・石室・壁画についての綿密な概要報告書を作成している。

古墳の本格的な調査は、京都大学考古学教室によって壁画発見二年後の一九三六年（昭和一一）から三八年（同一三）におこなわれ、その成果は『筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳』（京都帝国大学文学部考古学研究報告第一五冊）として一九四〇年（昭和一五）に刊行された（以下、京大報告と記



図5 ●京大報告に掲載された玄室の写真  
当時の報告書でカラー図版はめずらしい。

す)。この報告書の詳細な観察と記録方法は、当時の装飾古墳調査の最高水準をしめしている。なかでも、小林行雄こばやしゆきおさん作成の精緻な壁画模写図(図6)は、その後の装飾古墳調査の手本となった。

報告書の横穴式石室と壁画の項目を執筆した小林さんは、「王塚古墳の石室装飾は、その複雑華麗なる点において、日本の古墳のうちでは他に比類を見ない」とのべている。これまで日本で確認されている装飾古墳は約六一〇。王塚古墳以後、強烈な個性をもつ多くの装飾古墳が発見されているが、図文の複雑さと華麗さにおいて王塚古墳を上まわるものは見出されていない。壁画装飾の白眉という評価は今後も変わることはないだろう。

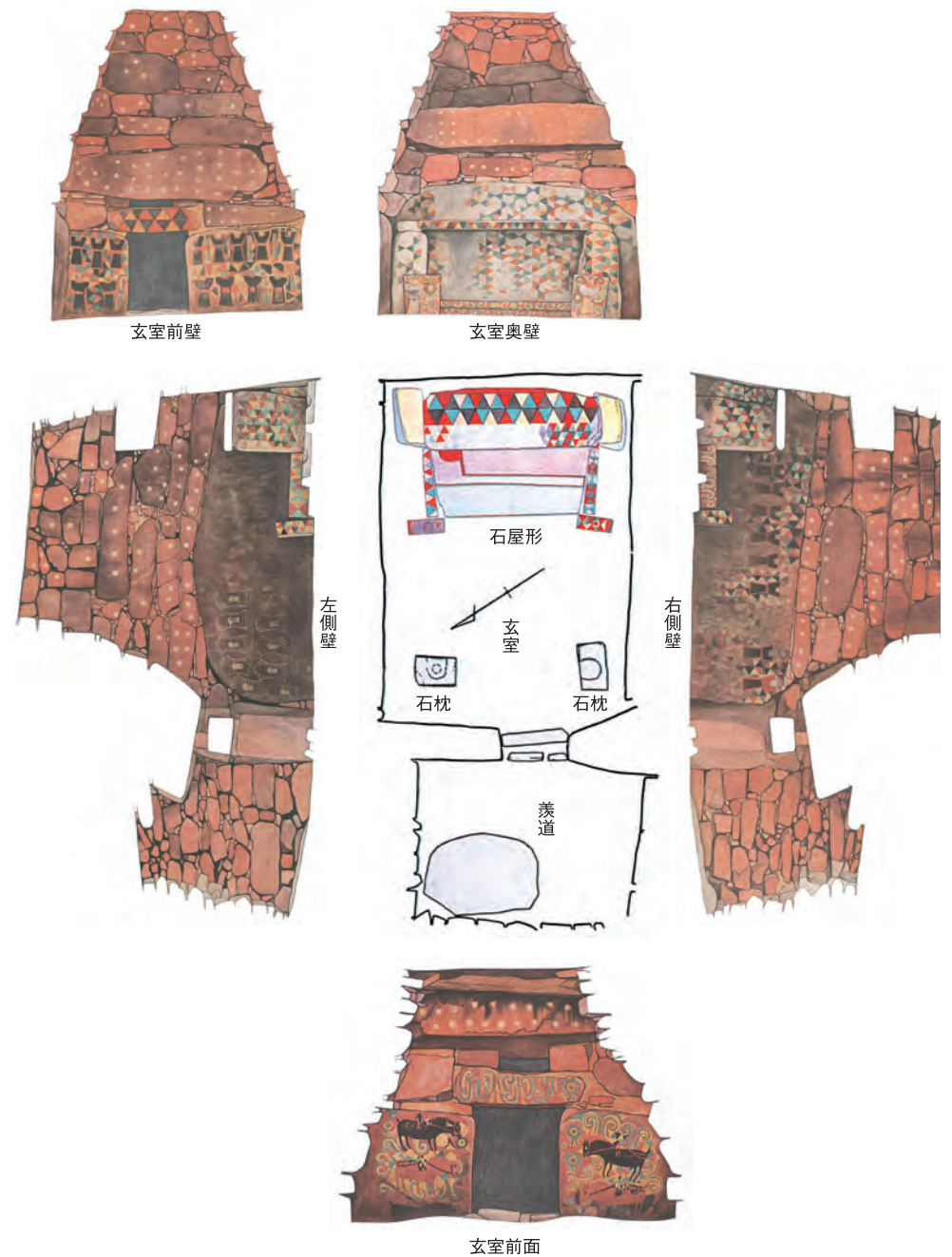


図6 ●小林行雄さん作成の壁画模写図  
発見当時の壁画保存状態を記録した貴重な資料だ(京大報告を改変)。